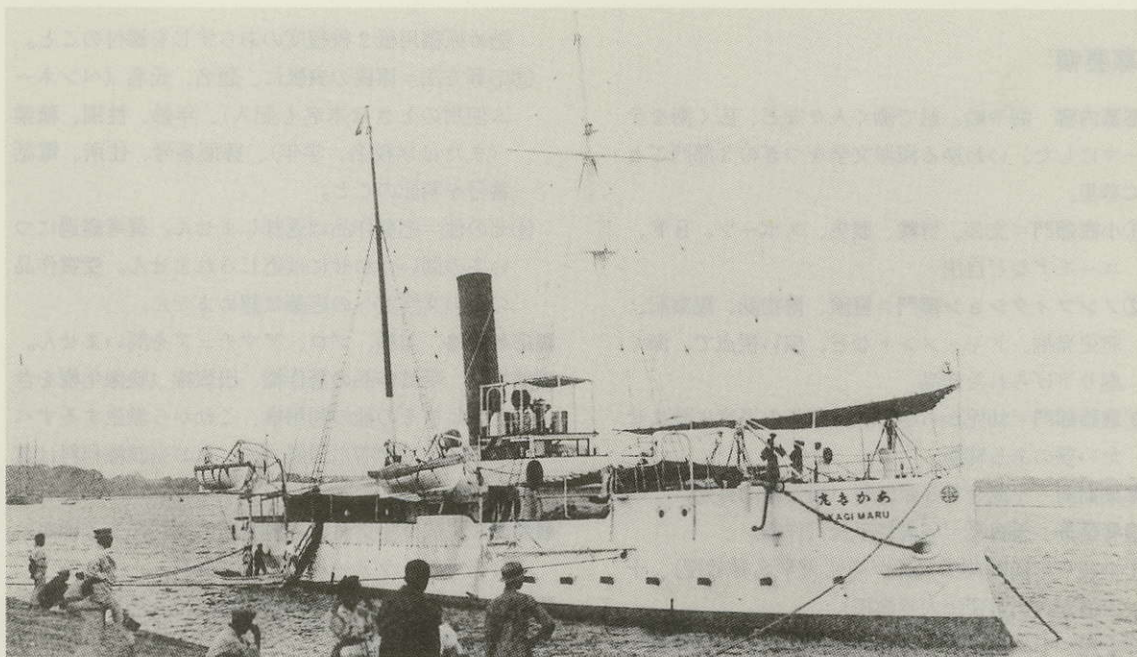


赤 城 丸

《主要目》クルーズ船、鋼製、川崎芳太郎
所有、367総トン、主機二連成汽機2基、
1890年小野浜造船所竣工、元砲艦赤城

クルーズ船に変身した黄海海戦の 敢闘艦



クルーズ船時代の赤城丸（写真提供＝安藤 岳）

川崎時代の「赤城丸」

軍艦「赤城」のちの「赤城丸」は、知る人ぞ知る名船中の名船である。排水量六百二十トンのこの鋼製砲艦は、日清戦争の黄海海戦で、自艦の数倍もある清国軍艦「来遠」ほかと砲戦をまじえ、艦長が戦死するほどの苦戦をしいられたことで有名だ。

一九一一（明治四十四）年に軍艦籍から退いたのち、神戸の川崎芳太郎が払い下げを受け、クルーズ船に改装、船名を「赤城丸」と改めた。芳太郎は、川崎造船所（のちの川崎重工）の創始者川崎正蔵の甥であり娘婿でもある。

この温厚篤実な人物は、同造船所の副社長として、松方コレクションで知られる松方幸次郎社長をささえた。

「赤城丸」のことは、山高五郎氏の名著『日の丸船隊史話』（一九四二年、千歳書房刊）と、氏が九十四歳で他界した年に刊行された『図説日の丸船隊史話』（一九八一年、至誠堂刊）にくわしい。氏の二書では、同船は艦籍を解かれたのち、尼崎汽船に払い下げられて貨物船になったとしており、除籍後、芳太郎所有のクルーズ船として使われた史実については触れていない。

ここに掲げた絵葉書写真をご覧いただきました

い。これがクルーズ船当時の「赤城丸」である。この絵葉書は、船舶研究家の安藤岳氏が発見したもので、芳太郎所有時代の姿を示す貴重な写真である。写真の下には、「七月五日ヨリ芝浦ニ於テ観覧ニ供スル元軍艦赤城ノ雄姿」というキャプションが付いている。ただし、何年の七月五日かは不明だ。

外形は砲艦時代と変わらないが、兵装が撤去されていること、煙突が高くなっていることに気がつく。さらによく見ると、船首に「あかぎ丸」と表記されており（『船名録』では「赤城丸」、菊のご紋章があつた位置に川崎造船所の社章が付いている）。

通信省管船局の『船名録』を追うと、「赤城丸」は一九一五（大正四）年に芳太郎から大阪の尼崎伊三郎の手に渡っている。したがってこの絵葉書の同船は、一九一一〜一九一五年の姿とみることができる。

川崎正蔵の専用クルーズ船

芳太郎は、川崎正蔵専用のクルーズ船にするつもりで同船の払い下げを受けた。正蔵がクルーズを楽しんだことは、彼の没後まもなく発行された伝記『川崎正蔵』（山本実彦著、一九一八年秀英舎刊）に出てくる。

それによると正蔵は、一八九四（明治二十七年）年に大病をしたのち、毎年夏になると船

を借り切り、家族をともなつて瀬戸内海から九州を遊覧航海したという。今でいうクルーズである。最初は大阪商船の船をチャーターしたが、のちには川崎造船所の小型船を用いて水入らずの家族旅行をおこなった。

一八九六（明治二十九）年に六十歳で社業を松方幸次郎と芳太郎に託した正蔵は、いかにも明治の企業家らしい晩年をおくつたのである。そして、ついには「赤城」の入手に至るわけだが、これに関して同書は、

「最後には日清役に驍名を謳はれたる軍艦赤城の払下を受け、之を快遊船式に改造して、晩年の遊船に使用したり。……」

としている。ただし、正蔵が実際に同船のクルーズを楽しんだかどうかは疑問が残る。というのは、正蔵は払い下げの翌年の一九一二（大正元）年に病没しているからだ。

最近刊行された三島康雄氏の『造船王川崎正蔵の生涯』（一九九三年同文館出版刊）では、「赤城丸」によるクルーズの時期を明治三十年代のこととしているが、このころの同船はまだ軍艦籍にあつたし、日露戦争にも従軍しているの、これはありえない。

ともあれ「赤城丸」が、黄海海戦の敢闘艦という勲章だけでなく、レジャークルーズ船のさきがけとして、日本の海運史上注目すべき船であることは事実である。

船体の大型化工事

前述のように「赤城丸」はその後、貨物船に改装され、元軍艦とは思えないほどの大変身を遂げた。ところが、その改装時期がはっきりしない。ただし手がかりはある。

最も有力な手がかりは、一九一七年版『船名録』以降、同船の船体が十メートルほど長くなり（約四十七メートルから約五十七メートルに延長）、主機が三連成一基に代わっていることだ。『船名録』は前年十二月末日現在の登録船を掲載しているから、同船は、尼崎伊三郎に身売りした翌年の一九一六（大正五）年に船体の大型化工事を受け、主機も改装して一軸船になったことになる。貨物船に改装されたのは、このときであろう。尼崎伊三郎は、この元有名軍艦を、貨物船に改装して使うぬらいで入手したのではないか。

通信省管船局の『日本汽船名簿』によると、改装された三連成主機のメーカーは大阪の原田造船所で、製造時期は一九一一年となっている。製造時期の点で『船名録』と整合性を欠くが、同船の改装工事を担当したのは、あるいは原田造船所なのかもしれない。

「赤城丸」は長寿船で、戦後の一九五〇年代の初めまで稼働した。同船の晩年については、山高五郎氏が詳述されている。（山田 廼生）